

「また、シロアムの塔が倒れ落ちて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいるだれよりも罪深い人たちだったとでも思うのですか。そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます」(ルカ13:4,5)

2011年3月の東日本大震災から3年が経とうとしています。14年1月時点で、死者約15,890名、行方不明者2,640名 全壊戸数12万戸、福島原発電源喪失によるメルトダウンによって現在も数十万人もの避難者がいるとされ、エネルギー問題を含めていまだ日本に与えられた傷跡は残されたまま、癒されていません。

日本列島は、美しい山と川、海に囲まれ、四季折々の美と、山海の幸に恵まれています。同時に火山、地震、台風、雪害など自然の災害も絶えることはありません。また、不幸な事故や犯罪、そして戦争で、自分や大切な人々の命や財産を奪われ、苦悩に苦しみ続ける人も、日本のみならず、世界のいたるところにおられ、絶えることはありません。

なぜ、ある人がこの世を去り、ある人は生き残るのか、そして生き残って、なお苦しむのか、この世は不条理に満ち、「神も仏もないものか」という叫びが聞こえてきそうです。

ルカ福音書は、「ピラトがガリラヤ人たちの血をガリラヤ人たちのささげるいけにえに混ぜた」(ルカ13:1)という事件が記されています。この内容は明確ではありませんが、ユダヤ人たちと常に対立し、最後には主の磔刑に許可を与えたピラトが率いるローマの勢力が、ガリラヤ人たちに、なんらかの暴力行為を働いたものと推測できます。血をいけにえに混ぜられたガリラヤ人たちは、ピラトの行為の被害者でした。そして「シロアムの塔が倒れ落ちて死んだあの十八人(ルカ13:4)」は、不幸な事故の被災者です。

主の述べられたことから、犯罪であれ事故であれ、当時は何らかの災難にあった人は、すべて自分の罪深さから来ている、と考えていたことがわかります。現代日本の私たちも、その人達が悪いことを行った報い、因果応報の実現ではないか、と考える人がいます。

しかし、主は「そうではない。」(ルカ13:3)と明確に否定されています。

ここで災難に遭ったガリラヤ人、シロアムの塔の崩壊によって死んだ十八人は、何を意味し、また自然的な意味で何故死ななければならなかったのでしょうか？東日本大地震で亡くなった2万人近い方々の災難には必然性があったのでしょうか？

この地球には、人の不慮の死や被害はやむことはありません。今世紀に入ってから、インド洋の津波(04年)、ハイチの地震(10年)では20万人を超える人たちが犠牲となり、もっと大きな厄災といえる戦争では、朝鮮動乱では3百万人、ベトナム戦争でも2百万人を超える人が犠牲となり、第二次世界大戦に至っては5千万人を超える方々が犠牲となり、現在でもシリア・アフリカと凄惨な状態が続いています。しかし、寿命や病苦の末に亡くなる方々は毎年6千万人に上り、日に16万人の方々が来世に移ってい

ます。私たち自身も、肉体の死をいつ、どんな形で迎えるかわかりませんが、それは必ずやってきます。それは苦しみの末の死かもしれないし、テロかもしれないし、あるいは家族や大切な人達に見守られた死かもしれない。そして、自分が大切と思っている人が苦しむ姿、報道や伝聞で得られる世界中の人々の苦しみとも、幾度も接しなければなりません。

地震や火山の噴火が完全になくなるためには、大陸や島嶼の土台である大陸プレートの動きが停止せねばなりません、それは地球の活動の停止であり、惑星としての死を意味します。台風や気候の変動をなくすためには、地球の自転の停止が必要ですが、これも地球上の生命の死滅を意味します。災害にある程度は備えることはできるはずですが、その規模は小規模な地震で収まるか、大陸の変動で終わるか、人智では計り知れません。

戦争は、国家間の利害だけではなく、国家と民族が正しいと考える信条の実現のために行われる側面があり、他国への侵略や虐殺などの犯罪行為を止めさせるための戦争もあり、戦争をすべて即時に中止せよ、というのは実情に即さない場合もあります。もちろん、一部の人間のために他の国民が犠牲になるなどはあってはならないことです。しかし、残念ながら人と人、団体と団体、国家間の軋轢はなくなりません、戦争は国家としての主張を通すための最後の手段であり、その主張の強さを抑制し、妥協し協調しない限り、いつかは紛争が起こります。生命が大切か、そのときの正義が大切か、時代の流れによって簡単に変わってしまうことを歴史は語ってくれます。過去に倦み苦しみ二度と起こさないと誓った国でも、その経験を忘却し、立場や、法律や憲法さえ、自分の大義？のためには変えることも、なんとも感じなくなります。状況によってころころ変わる人智は、あてになりません。

また、病や老いに対して、それが本人の不摂生や、それが蓄積された遺伝の結果であれ、自分の運命を受け入れずに、本人として闘いたい、大切な人を失いたくないという想いとらわれ、少しでも生命を伸ばしたいと、昔から人間の望みは変わりません。医者となって多くの人を救おう、あらゆる手段で生かし続けようとし、現代医学や科学は崇高な目的をもって邁進してきました。その結果、本人のみならず、近親の方々、社会自体も大きな負担を抱え、ただ生きて、苦しみに長く耐えなければならないケースが多く目につくようになりました。どんなに科学が進んだとしても、肉親の情や倫理など人や世の知恵では、このバランスをどうすればいいのか判断できず、最後は本人や肉親の判断に委ねられ、不治の病に、有効かどうかわからない治療を重ねるか、さらに難しい選択を迫られます。なんとか寿命を延ばそうと思って知恵を絞っても、本人と周囲の苦しみという矛盾にぶつかります。

原子力を含むエネルギー問題、環境問題も複雑で、原子力即時廃炉を叫ぶ方も多く、その気持ちは真摯なものがあります。一方、化石燃料から排出された他国の粒子状物質が流れ込んだり、オゾン層の破壊による異常気象が激しくなったりしています。核エネルギーの安全な利用ということで、核融合で生まれた太陽光エネルギー、そこから派生した潮汐・風力エネルギーの活用、そして人工的な核融合と努力は続けられていますが、今現在のエネルギーに取って代わり、日々の生活で実用化されるのはまだ先のことのように見えます。

このように、人間の知恵では、すべてが絶望か失望に行き着きます。

天界の教えに、人智のことを尋ねるなら、

「人智などというものは存在せず、あるように見えるだけだが、その外観は必要である。しかし、神の摂理は、最も微細なものにまで、普遍的に存在している」（神の摂理191）とあります。

人の知恵といっても、「人の思考のすべては、その生命の愛の情愛から来ている」（＃193）、それは自分の愛することから離れて思考することはできません。極端に言えば、自分の都合の良い風にしか人は考えることができないのです。そのため、人の思考は、必ず偏ってしまいます。

しかし神の知恵は違います。神の知恵、神意は、すべてのことを予見され、備え続けておられますので、特に摂理と呼ばれています。神様のご意志と知恵が、力のある法則として現に働いています。

「神の摂理は、永遠のものを見つめ、それが永遠のものと合致するときのみ一時的なものをも見つめる。」
（神の摂理214）

一時的なものとは、物質世界が所有する物と、そこから人間の所有する物すべてです。（＃219）

空間と時間に縛られたもの、すなわち生物としての生命をはじめ、富、名誉、組織の権力、人智から出たすべて人間の意志から出たものすべてです。

人の生命や地球の生命、エネルギー、のすべては限界と終わりがあり、枯渇し、滅んでゆきます。

「この天地は滅びます。」（マルコ13:31、ルカ21:33）と主が語られた通り、空間と時間に縛られた天地も、人の生命も必ず滅びます。「しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。」主のみことばである神的真理は、決して滅びません。なぜなら、時間と空間の外で、永遠のものを見つめていらっしゃる主が、その神的真理の実現を絶えず、そして永遠に働かれておられるからです。そして、その目的は、ただ人に短期的ではなく、永遠の幸福をお与えになるためです。

「人をお救いになる神の摂理の働きは、人の誕生に始まり、そしてその生の終わりまで続き、そして永遠に続きます」（神の摂理331）。永遠に続くのは、天使となってその天使がこの世を離れた時に持った善と真理への情愛の度に応じて、さらにその知恵について、完全にされ続けるからです。とすると、この世においては、誕生から死に至るまで、救いのための神の摂理が働いていることとなります。そしてその働きは、ほんの一瞬も止むことはありません。

主はおっしゃっています、「二羽の雀は一アサリオンで売っているでしょう。しかし、そんな雀の一羽でも、あなたがたの父のお許しなしには地に落ちることはありません。また、あなたがたの頭の毛さえも、みな数えられています。（ルカ10:29, 30）人のごくごく微細なことまで、神の摂理が働いています。そしてその微細なことは、すべてその人の、一時ではなく、永遠の幸せ・救いのために役だっています。どんな苦しく、不幸な目に、そして不公平な目に遭っていたとしても、それは永遠の観点からすべてはその人の幸せのために役にたっています。そのため主はおっしゃいます、「だから恐れることはありません。」（ルカ10:31）

運命のことにに関して述べられている中でも、「これは神のみ摂理が、人の思いとか行いのすみずみにいたるまで、働いておられ」（神の摂理212）、人の幸福に導こうとされています。

ルカ福音書13章の話に戻ります。「ガリラヤ人たちの血をガリラヤ人たちのささげるいけにえに混ぜた」、「いけにえの血」とは神的真理を意味し（黙示録解説329-10）、これは神的真理が冒瀆されたことが意味されます。そして「シロアムの塔が倒れ落ちて死んだあの十八人」について、十八は三と六の乗数であり、三は神聖を、六は闘いを意味し（天界の秘義1709）、試練の状態を意味します（＼ 4617, 7284）。さらに、「塔」は内部（＼ 4599-2）、自己崇拜（＼ 1306）や、偽りの教義の確認（黙示録解説410）を意味し、試練の状態の中で、内部が確認され、「死んだ」すなわち最後の審判が下されたことが意味されます。

事象としては犯罪や事故に見えますが、内意では、神的真理の冒瀆や、試練の中での自分の愛の確認によって、最後の審判に至ったことが意味されます。そのため主は「あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます」と強い警告をなさいました。最後の審判は、教会の最後の時を意味しますが、それは「人が死んだ時にも待ち受けていて、その時には、その人が生きていた間に行った行動によって、死か生へと審判されます」（天界の秘義931）

私たちがなすこと、それは再生することではありません、なぜならそれは主の御業であるからであり、また改良されることでもありません、なぜならこれも主の御業であるからです。私たちがなすべきことは、主の語られた「悔い改め」です。すべての人が蓄積した遺伝悪の中に生まれ、それを気づかずに生きています。悔い改めて、これを取り除かねば、主の御業である改良も再生も始まりません。

自分の遺伝悪を個々に認め、理性から納得して、主にお願ひしてこれを離れます。そしてその悪に立ち返らないよう新しい生活を始めます。様々な人生の問題の難問に出会ったとき、考えます。これは自分から出ていることか、主の御心にかなっているのか、懸命に考えます。感情に流されず、冷静に、短期的でなく長い目から考え、そしてそれが主の深い摂理に反して、自分の欲や、一時の想いから出たものなら、これを主に対する罪として避け、悔い改めます。何もしないで主の御業を待つだけなら、それは自分のためにも人のためにもなりません、忠実な召使いのように、与えられた理性を用い、しかもこの理性は主からの授かりものであり、自分はこの賜を大切に扱う召使いであるということを忘れません。

私たちが、すべては主の御摂理によってなされていることを知って「主の門」から入るなら、「これは主のなさったことだ。私たちの目には不思議なことである。」と後からその摂理に気がつく日が必ずやってきます。そのとき、私たちは世の中の矛盾や不公正や運命があっても、すべて主の摂理の中に、私たちが救われ幸福になるためであることを知り、こう心から叫ぶ時がやってきます。

「これは、主が設けられた日である。この日を楽しみ喜ぼう。」（詩編118:24）アーメン

詩編118:19-24

義の門よ。私のために開け。私はそこからはいり、主に感謝しよう。
これこそ主の門。正しい者たちはこれよりはいる。
私はあなたに感謝します。あなたが私に答えられ、私の救いとなられたからです。
家を建てる者たちの捨てた石。それが礎の石になった。
これは主のなされたことだ。私たちの目には不思議なことである。
これは、主が設けられた日である。この日を楽しみ喜ぼう。

ルカ13:1-9

ちょうどそのとき、ある人たちがやって来て、イエスに報告した。ピラトがガリラヤ人たちの血をガリラヤ人たちのささげのいけにえに混ぜたというのである。
イエスは彼らに答えて言われた。「そのガリラヤ人たちがそのような災難を受けたから、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い人たちだったとでも思うのですか。
そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。
また、シロアムの塔が倒れ落ちて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいるだれよりも罪深い人たちだったとでも思うのですか。
そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。」

神の摂理 212 アルカナ訳

「運命 Fortuna」を口にしない人はいるでしょうか。それを口にしたり、ある程度経験によって知っている以上、みとめないわけにはいきません。しかし運とは何か、分かっている人がいるでしょうか。運が実際に存在する以上、何かそれらしきものがあることは否定できません。しかも何かがあれば、原因があるはずで、それにもかかわらず、それらしきもの、つまり運ですが、その原因は分かっています。

原因が分からないと言うだけで、運を否定してしまわないでください。サイコロとかトランプを手にしてみるといいでしょう。ゲームに加わっている人に聞いてみることです。その中で運を否定する人がいるでしょうか。かれらは運とたわむれ、運はかれらとたわむれ、それは見事です。

運が気に入らないからといって、それに抵抗できるでしょうか。運は人の思惑や知恵をせせら笑っているようです。あなたがサイを振ったり、カードをくっているとき、運がある理由あって、一人が他の一人より運がむくようにするため、手先の回転やひねりまでも知り、それをつかさどっていると思いますか。ここには神のみ摂理以外の原因は何もありません。神は、ことの最終・末端的な起こりの中にも、ときにはつつがなく、ときには波乱をふくんで、ご自分の姿を隠しつつも、驚くほど人のチエと重なって働いておられます。

(2) かつて異教徒たちは「幸運の神」を信じ、神殿を建てたりしました。イタリアのトーマにもあることはご存じのとおりです。この幸運の神こそ、神のみ摂理の最終・末端的働きのことであることは申しあげました。それについて、わたしはいろいろ教えられましたが、いま明らかにするわけにはいきません。ただこれは精神的錯覚でも、自然のいたずらでも、原因のないことでもありません。原因がなければ、何かではな

くなります。これは神のみ摂理が、人の思いとか行いのすみずみにいたるまで、働いておられるという事実を目撃していることなのです。神のみ摂理は、このようなごく些細なことでも、その一つ一つの中で働いているとすれば、この世の平和とか戦争にかんすること、救いにかんすること、天界での〈いのち〉にかんすることで、その一つ一つの中で働いておられないはずはありません。